

2020年の感染症流行時における遠隔高等教育の実践とリスクの管理 ——ウェブ経由での遠隔講義の実施と評価

後藤 将之 (成城大学名誉教授)

1. 経緯

1-1. 研究経歴上の背景

筆者は1990年から2年度にわたり、マルチメディア教育の研究および開発を行う国立の研究所（文部省直轄研・放送教育開発センター，英名 National Institute of Multimedia Education. 制度上の区分は国立大学）に在籍し，各種のマルチメディア通信教育システムの構想と開発に従事していた。この時期に発想された筆者の構想の一定数は，当時，当該研究所の研究会などで報告され，公表されている（例：後藤，2019a）。

その後，筆者は，この時期に得られた知識と経験を基礎として，とりわけ2000年前後から，自らの負担する大学の授業科目において，積極的にマルチメディア教育の手法を取り入れた教育実践を試行し，その課題を検討してきた。これら結果の多くは本学紀要などで既報である（後藤，2011；2012；2013；2014；2015；2017；2019b）。これらの作業の多くは，授業運営において，いかに効果的かつ学生と教員の双方にとって適切に，各種情報メディアを利用するかに関する試行であり，ある例（2012）では，社会調査の実施において，ネット上に設計・準備したウェブページ経由の質問紙調査を全面的に採用して，遠隔地の回答者からの質問紙調査への回答を集め分析する試みをも行っていた。

さらにこれら以外にも，自分のゼミに所属する学生からの各種の協力依頼に応じて，独自にレンタルしているウェブサーバー上にて独自にウェブデザイン・ソフトを用いて準備した社会調査用の回答用フォームから，ネット経由での各種の質問紙（アンケート）調査を実施する社会調査の実査指導と協力をしたこともしばしばあった。

インターネット経由での遠隔授業と社会調査は，一定の抽象的な視点からはよく似た作業である。すなわちこれらは，一定数の人間（遠隔授業では学生，社会調査ではサンプル対象者）に，ウェブページ上の情報（遠隔授業では講義ノート，社会調査では調査票）へアクセスさせ，それに対する反応（遠隔授業では小テストへの解答，社会調査では調査質問への回答）をネットワーク経由で返信させる，という抽象的な形式においてはほぼ同一の，インターネット経由での1対特定多数の作業だといえる。

このようなインターネット経由での社会調査や遠隔授業には，それぞれについて，各種の利点と問題点がある。また，これらネット利用の作業は，必ずしも「距離の克服」を第一義として実施されるわけでもない。ネット上のページから随時利用できるこれらのサービスは，「使える時に，自由に使う」と

いう随時性、オンデマンド性、時間的な融通性にもしばしば意味があることが、経験上判明している。具体的には、たとえ近隣地の住民への質問紙調査であっても、「都合のよい時間帯に自分から対応できる」のであれば、結果的に回答率が上がる可能性がある。反面、いっそう対面的な調査や授業の実施では問題化しにくい各種の問題が発生して、対応が必要になることも多い。

以上のような、筆者の90年代からの研究経歴を踏まえた上で、今回、合わせて通年1年間にわたる半期の講義科目2科目（前後期各1）について、そのすべてを、上に紹介したような独自に設計し自己管理されたホームページ経由での遠隔授業として展開する機会があった。その実践を紹介し問題点とリスクを評価するのが本論の目的である。

1-2. 社会状況的な背景

2020年春から全世界規模で発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の大流行への対応のため、日本国内の多くの大学では、いわゆる「3密の回避」や「クラスター発生防止」の見地から、急ぎよ、4月の新学期からほとんどの通常の対面授業を遠隔授業に切り替えて実施することになった。感染症の流行が突然かつ急速なものであったため、2020年春からの遠隔授業への切り替え対応が、当初予定の学事暦より遅れる場合も多々みられた。2020年度に本学において筆者が負担した2つの講義科目、すなわち前期「マスコミ原論」および後期「社会心理学」についても、決定時期に相違はあれ、いずれも全面的に遠隔授業として実施する基本方針が大学から示された。このためその方針に沿った対応をとることになった。

2. 遠隔講義実施上の考慮点

2-1. 基本設計

この突発事態においては、比較的柔軟な実施条件が学校側から提示された。一般的な遠隔授業の実施方式としては、今回初めて大々的に一般社会で注目された遠隔会議システム Zoom 利用でのリアルタイム双方向の遠隔授業の実施や、しばらく以前から導入されていたウェブ経由での資料配付とレポート提出システムであるウェブクラスなどを利用することが示唆された。だがそれだけに限定されず、授業運営主体である教員の意向に沿った方針も、幅広く許容されていた。じっさい、マルチメディア教育法の導入初期から議論されてきた問題であるが、特定のデジタルな授業実施システムは、必ず一定の授業実施上の方針や基本的な指向性を、具体的な授業内容と運営方針に対しても課してくるものであるため、大学における教育の自由の根本的な理念からも、単一の方式のみが排他的に強制されることは多大な問題を含んでいる。国内で、かつて、マルチメディア利用の教育法の初期導入に当たって一定の懸念と抵抗が存在したのは、このように、「方法」が「内容」を事実上拘束しうる現実が配慮されたためであったことを筆者は実体験から記憶している。

ところで筆者は、上述の遠隔授業の方式が開発または導入される以前から、独自に賃貸したウェブサーバー上に自身で制作したホームページ経由にて、講義関連資料の配布、出席の確認と小テストの受

け付け、各種の社会調査の実施などの作業を行っていた。2000年代からこのような各種のメディア教育と研究の実践を問題なく試みていたので、今回の突発事態にあたって、10年以上にわたって馴染んでいた、自分が直接運営するホームページ経由での遠隔授業の実施が、低リスクでの教育サービスを提供できると判断された。そのため、この方式での遠隔授業の実施をまず構想し、その方向での準備を行って、最終的に、この方式にてほぼ問題なく、2つの講義を遠隔授業で実施することができた。

2-2. 具体的な考慮点1：パソコンと通信環境の問題

筆者が例年担当している上記の2講義では、いずれも毎年100人前後の履修登録者が存在していた。多い場合は百数十人となり、少なれば百人を切るが、およその概要としてはその規模の人数が履修登録する、いわゆる「大教室での講義科目」の授業だった。

この規模の授業になると、受講者の性質はきわめて多岐にわたることが経験的に知られており、それについては筆者も過去に検討した（後藤、2015：2019b）。

とりわけ今回、問題化しうると予想されたのが、履修者サイドにおけるパソコンと情報通信環境の大きな偏りだった。学生における情報通信機器への個別のアクセス可能性は、きわめて多岐にわたっている。一方には、自宅で自分専用のPCを光回線にLAN接続して高速なネット環境にアクセスしている者がいるが、他方には、自分用の（あるいは家族と共用の）スマートフォン1台とそれが利用する4G（LTE）通信回線だけしか利用できない（または、これまでそれ以上を必要と感じていなかった）学生たちもまま実在している。この現実、2000年代から上述した各種の試行的運用実験を継続的に実施してきた筆者にとって、無視しがたい、もっとも困難な現実的な前提条件だった。

この前提から出発して、履修生（その多くは進学直後の学部1年生であって、直前まで高校生だった人々であった）について想定される、ベースラインの情報通信機器の環境として、以下を想定した。それを誰にもわかりやすい表現で要約した。すなわち「iPhone SEの水平（横向き）画面にて、4G（LTE）電話回線で、問題なくアクセス、表示・判読、ダウンロード、および質問に解答できること」。この要点は、現代の高校生がおよそ個人的に利用可能と想定できる最低限度の情報通信機器の環境をミニマムの要求として、それ以上の追加の要求はしないようにとどめた、ということである。

以上のミニマムな要求下で提供される情報通信機器サービス構成の基本方針として、以下の遠隔授業の運営方針をまず策定した。

- 1) あえてパスワード類でのアクセス制限を一切かけない、できるだけプレーンなホームページ経由にて講義内容を配布すること。ただし同様に、そのHPからは、私的な重要な個人情報（メールアドレス、パスワード類、もちろんカード類の番号など）をいっさい入力・送信させず、かつ要求しないようにすること。要するに、アクセスの際のセキュリティを多少抑えてでも、多様な環境からのアクセシビリティを高いままに維持することに意を砕いた。上述した学生の多様な情報機器環境を考慮すれば、かなり古いPCやOS、その上のブラウザが、良し悪しとは無関係に現に使用され続けている可能性は否定できず、それらからのアクセシビリティをできるだけ確保しようとした。多

くの「情報提供」型サイトはこのように運営されており、結局のところ、ユニバーサルアクセスの理念の1つの具体化はこのような対応である。この目的から、あえて暗号化されていない（httpsではない）ホームページから講義内容を提供した。ちなみに日本でもっとも大規模な時刻表検索サイトなども、暗号化されていないサービスである（2020/11/12 再確認）。

このことはまた、興味をもつ誰でもが筆者の遠隔講義を容易に参照できることをも含意している。緊急事態下での確実な情報提供の作業を、関係者に広く説得的に明示する目的からは、このように履修登録者以外の誰であっても随時参照可能な配信システムが望まれる。端的に言えば、学生の保護者であっても、実際にどのような授業が行われているかがチェックできるよう配慮した。さらに、筆者の知人数人に案内状を出して、このようなホームページ経由での授業実践を行っていることを周知し、その一部からは意見をも得た。

- 2) 講義内容の中心となるのは、「授業の全回数分の講義ノートのPDFファイル」（サイズは約20メガバイト）であり、これを講義期間中、常時、当該HP上に掲載して、「いつでもどこからでも4G回線が確保さえできれば」、PCやスマートフォンにこれを表示・ダウンロードして、随時参照できるようにした。このことが不可能な情報通信機器環境は、現状の大学生の一般的な条件下では、ほぼ存在しない。また、もしそのような場合であっても、家庭内や、家族などの保有する同等の機器と情報環境から（上述のようにパスワード類でのアクセス制限がないため）利用が可能である。
- 3) 学校側からの希望もあり、また講義への包絡感 *sense of involvement* を高めるためにも、講義回ごとに、その回の講義ノートの内容をさらに詳しく説明する「講義の録音音声」を、筆者自身の負担で制作し、それを必ず各講義回の事前にHP上に掲載した。

なお、この録音音声も、できるだけネットワーク負担を低減するために、いったん筆者が録音した毎回100メガバイト超サイズの音声ファイルを強く圧縮し、各回30メガバイト程度の軽い音声ファイルに変換した上で、それをHP上に掲載した（この大きさは、撮影時の解像度にもよるがデジカメの静止画像1枚程度のファイルサイズである）。なお現代の大学生においては、内容そのものに興味関心が抱かれている場合、当該メディアファイルの解像度・精細度は必ずしも問題とされない傾向も確認されている（後藤，2011）。

しばしば学校側が用意できる遠隔授業システムでは、個々の教員が利用できるデータ容量の上限が限定的に設定されているが、今回の場合には、筆者個人が賃貸し運営するウェブホスティングサービス上の2ギガバイトが上限のクラウド容量を利用した。そのため、圧縮音声を用いたこともあって、1度にアップできる講義の録音音声には、ほぼ実効上の制限はなかった。その意味では、余裕をもって「講義ノート」と「講義録音音声」の各回の配布がネットワーク経由で行えた。

ただし、遠隔授業への切り替えが突然に要請された前期の講義では、時間的な切迫性から、各回の講義録音音声は、各実施回の1～2週間程度以前から公開するのが精一杯だった。これに対して、時間的な余裕があった後期の講義では、夏期休暇を返上して全回分の録音音声を休暇中に制作しておき、9月の開講時には、すべての講義録音音声を、全回分の講義ノートのPDF書類と一緒に、1度にHP上に

アップしておくことが可能だった。

なお、講義ノートについては、前後期を通して、全回分を開講の数週間前から最終回まで公開した。講義ノートはA4用紙サイズで100～150頁のPDF書類であり、やや厚めの新書1冊分程度のボリュームだった。また、大学の広報システムを利用して、「本授業については全面的に専用のホームページ経由で実施すること」を事前に告知し、このHPへ受講者を誘導した。

したがって理論上は、もし講義の録音音声が必要としないならば、開講後のいつからでも「全回の講義の受講」（＝事前に準備された各回講義のノートを読んで理解すること）が可能となるように配慮した。また、もし、さらに講義の録音音声が必要とする（＝講義ノートに依拠した教員の講義の音声を聴きつつ講義ノートの理解を進める）のであっても、前期においては少なくとも各回の1～2週間以上前から各講義日時までこの学習が可能であり、後期においては開講直後からずっと、全回の講義ノートを参照しつつ、その講義音声も聴くことができるという、いわば完全な随時オンデマンドでの講義提供環境を整えた。

2-3. 具体的な考慮点2：出席確認と理解度確認の方法

以上1)～3)の方針で、筆者自身が個人で制作したホームページ経由での遠隔授業は、前期の講義録音が突発事態による時間的制約から一挙掲載できなかつたことを除けば、すべて完全なオンデマンド配布型の講義形式で提供され、「希望するいつでもどこからでも（公開期間内なら）何度でも」、さらに言えば「誰であっても」、最低限の情報機器と環境があれば、講義ノートとそれを解説する講義録音にアクセスすることが可能だった。

ところで全ての授業は、講義内容の提供→その理解を確認する何らかのテストやクイズ形式での質問の作成・配布・実施・回収・採点、という流れで行われる。今回も、通常の対面授業と同様の、出席確認および毎回の理解度確認の作業が必要となった。

授業運営のこの部分については、あえて時間的な融通性をさほど与えず、各回の実施日時に限ってのみネットワーク経由での提出が可能な、解答システムを設計し用意した。

すなわち、まず、半期原則15回の固定された「授業実施日と時限」を学事暦から確定した。それぞれの日時に限定して、ホームページ経由での「その授業回の出席・理解度確認フォーム」が公開され、そのフォームへの記入事項が、担当者宛てに送信できるようにした。というのも、この部分（出席・理解度の確認作業）までをもオンデマンド的な随時の作業としてしまうと、本来は「対面の定時の15回の講義」として設定されていた当該授業の性格が、あまりにも放送・ネット授業に類似してしまう。あくまでクラスター化回避のため、「本来ならば大教室で実施する教育を、ネットワーク経由にて、便宜的に代替して行う」ことが今回講義の趣旨であった。したがって、「学事暦に沿った原則15回の授業実施日と時限」内のみ、「出席・理解度確認フォーム」の公開、送信、受付を限定した。

ただし、現実的な運用としては、筆者自身の生活時間上の制約などからも、当該日の「出席・理解度確認フォーム」をHP上に公開するのは、当該日の早朝0時～5時前後になりがちだった。なにより、履修者は随時このサイトにアクセスしているので、そのようなアクセスが絶えがちな、深夜～早朝の時

間帯での HP の書き換えが必要だったからである。したがって、当該日であれば、必ずしも授業時間内でなくとも、フォームへの記入と送信が可能だった。同様に、これらの授業は「3限に実施」と授業時間割上で配置されており、本来なら 13:00～14:30 が授業時間帯であった。しかし現実には、「フォームの受付締め切り」は 15:00 までとして、あえて 30 分多くフォーム記入時間を与えた。これらはもうひとつには、不慣れな解答用フォームへの記入時間に余裕をもたせるためだった。

基本的な本授業の履修イメージとしては、「随時、オンデマンド的に、教員運営のホームページ経由で、講義ノートと講義音声にアクセスできる（それぞれ PC などにダウンロードも可能であるし、ストリーミング配信的に利用することも可能である。講義ノートをブラウザのタブとして表示・参照しつつ、別タブで該当箇所の講義音声を聴くこともできる。このようにして、「テキストを参照しつつ講義を聴く」体験をエミュレートした）。ただし、講義各回の出席・理解度確認（リアル教室内での出席管理、小テスト・レポート実施に相当する）については、受付時間が（上述のようにとりわけ締め切り時間については）厳密に指定されているので、毎回、学事暦に沿った授業実施日と時限に、それを HP 経由にて教師まで送信する」ということである。

以上のように、この出席・理解度確認が「毎回の定時テスト」であることから、本授業はまったくのオンデマンド配布型講義ではなく、講義内容はオンデマンドで配布しつつも、出席・理解度確認はリアル教室内と同様に、毎回定時に、ただしネットワーク経由で実施するという、オンデマンド型+定時解答指定型の複合型授業運営となった。

この「出席・理解度確認フォーム」もまた、講義配布と同じく、筆者が運営するホームページ上の、毎回新しく準備された 1 ページから、記入・送信してもらった。このフォームについては、上述した、これまでしばしば実施経験のある「インターネット経由での質問紙調査」のさいに利用しているのと同様に設計・用意された「解答用フォーム（学生が各種の解答を記入・送信できる 1 ページのウェブページ）」を応用した。これら講義用ホームページの現物の一例を、本論末に採録してある（資料 1, 2）。この「出席・理解度確認フォーム」では、慎重を期して、以下のような基本構成を毎回必ず採用した。

- 1) 出席確認については、あらかじめ準備したプルダウンメニューから、「所属学年」「所属学部学科」それぞれを 1 つ選択してもらった。続けて、文字化け懸念から「学籍番号」は半角英数字にて、「名前」は全角ひらがな（外国人留学生はカタカナも可）にて、それぞれ記入欄に記入してもらった。つまり、平常時ならば「出席カード」類に記入してもらった内容の簡略形を送信してもらったことになった。これら 4 項目が、履修者名簿（エクセル表形式）にある情報と一致した場合、当該者を「出席」としてカウントした。この出席確認作業は、基本的に必ず毎授業回について実施した。
- 2) 理解度確認については、上記 1) の 4 項目による出席確認に続けて、毎回、基本的に 4 問の設問への解答を課した。これら 4 問は、当該講義回の講義ノートと講義音声から出題され、講義の内容の理解を確認するものを中心だった。具体的には、毎回、最初の 2 問は、「設問への正しい解答を、プルダウンメニューから 1 つ選択させる」方式、3 問目では、「1 行 100 文字程度の解答欄に、設問への解答を記入させる」方式、最後の 4 問目は、「300～500 字という文字数指定をした上で、

テキスト入力欄に設問への解答と自分の意見や感想を記入させる」という、やや自由度と要求度の高い記述問題とした。全体として、2つの語句選択をプルダウンメニュー形式で行わせ、1つの短い文章や語句を講義の中から抜き出させ、最後にいっそう大きなテーマについて、当人の言葉で説明させ感想や意見を300～500字で記述させるという出題構成での小テストを、毎回繰り返した。フォームの末尾に「使用した端末類の種類」をプルダウンメニューから選択してもらった。

- 3) この「ウェブ上のフォーム」による出席確認と理解度確認という発想は、これまで多年にわたりウェブページ経由での講義内容の提供と出席確認と解答受付を試行してきた筆者にとっては、回避しがたい方向性だった。

すなわち、もし「授業内での質問に対する解答をメール送信させればよい」というだけのことならば、その送信経路には、あらゆる可能性が考えられる。しかしすでに後藤(2015; 2019b)などで実証的に示されていたように、多様性に富んだ履修者をもつ授業クラスの運営にあたっては、各種の例外的な事例を想定しなければならない。要約的に言うならば、「受講学生のメール送信環境が、きわめて多岐にわたるため、学生のメールアドレスからの送信では、教師の管理する受信メールアドレスへの送信が、確実かつ成功裏に実施されるとは限らない」実例がままあるということである。送信先・受信先をあらかじめ一定の許可された相手のみと設定してメールアドレスを利用しているといった場合や、PCからの返信は一括して受信拒否している(しかもその設定にしている自覚もない)場合など、単純きわまりないメールアドレス間でのメールの送受信であってすら、確実に実施できないという状況は、過去の試行においても多々発生していた。

これら過去の試行経験を踏まえて実施したのが、今回の「ウェブページ上の解答用フォームによる出席と解答の送信」という発想だった。毎回の4問による出席確認と、同じく4問による理解度確認とは、毎回(そのURLアドレスも含めて)更新される「ウェブページ上の解答用フォーム」経由にて、そのページの下部に設置された「送信」ボタンをクリックすることによって、「一切の受講学生のメールアドレスや、パスワード類を利用することなしに」、筆者の管理するウェブサーバーへ送信される。

ウェブアンケートなどで多用されているこの方式での、ウェブページ上の解答用フォームを利用した出席確認と理解度確認には、「基本的に、履修学生の私的情報(メールアドレスなど)を不問として、ある程度公的なIDである学籍番号とひらがな化した名前にて出席管理する」という根本的な思想があった。なぜなら、すでに多くの大企業や大学などであってすら、定期的に、収集した社員や学生についての、重要な影響がありうる個人情報流出している、という現実がある。学生たちはそのような事態と危険性を恐れている。である以上、学生の私的な情報は、メールアドレスであっても一切要求せずに解答が送信できるシステム設計をすれば、非常事態下での受講生の安心感はいっそう確保され、授業に集中しやすくなるだろう。

この目的から、今回の遠隔授業システムでは、私用・公用を問わず履修学生のメールアドレスやパスワード類はいっさい要求せず、学籍番号と名前のひらがなの入力を求め、ウェブページ上の解答用フォーム経由で(履修学生には公開されない筆者の受付専用メールアドレスへ)彼らの解答部

分のみが、1人1通のメールとして送信されるシステムを設計した。この発想によって、ネット授業が不可避的にもつ一定のリスクを回避しようとした。

このウェブサーバーには、ある程度規模の大きなウェブサービス会社が多年にわたり安定的に提供しているウェブホスティングサービスを利用した。小規模のネットショップなども利用するサービスであるため、管理は安定しており、そのメール授受能力は、100人規模ほどのユーザーからの送受信を1度に処理するには十分なものだった。事実、これらの遠隔講義を通して、送信された出席確認と理解度確認のメールが受信されなかったことは全くなかった。また、ほぼ全てのメールは、せいぜい数秒程度のタイムラグで筆者のメールアドレスへとどいており、実効上の問題はなかったといえる。(後述するように、むしろ送信が容易であることに起因する若干の問題があり得たくらいである。)

- 4) なお当然だが、100人について、上記のような15回分の「出席・理解度確認フォーム」を送信できれば、つまりリアル教室内で提出させた1500枚の小テスト用紙をチェック、採点、成績処理する作業量相当となる。各回4問からなる小テストであるから、半期15回では60問の問題作成を行ったのち、それらを毎週100人分、採点する作業量である。履修学生にとっても、これだけの回数だけの課題量に対応する作業となる。

ただし、後述するように、この授業では例年通りの「大教室に集合しての期末テスト」がクラスター発生回避のために実施できなかった。したがって、授業の成績は、もっぱらこれら15回、各回4問からなる60問程度の課題への解答と、出席確認とに基づいて出されることになった。リアル教室内での期末テストが、平常時の小テストの何回分に相当するかは一概にいけない。ただし、もっとも負担の大きい課題は、4問目の「300～500字での記述」であり、これは、仮に300字で15回実施ならば4500文字相当の記述解答となり、半期講義でのレポート課題の要求文字量としては決して過大なものではない。

以上の遠隔授業システムの基本設計と統合的な視野に基づいて、急きょ、2つの半期にわたる1年間の講義科目2科目を実施した。この期間に用いられたホームページの現物と、出席・理解度確認フォームの現物の1例は、巻末に資料として採録した。なお、ホームページの作成と管理にあたっては、Mac OS上のホームページ作成・ファイル管理ソフトiWeb, Sandvox, RapidWeaver, Cyberduckなどを適宜利用して設計したウェブページを、利用・再利用した。なお、ごく一般的なウェブホスティングサービスを利用しているが、安全のため名称の明記は避ける。

実際のところ、この遠隔授業システムにおいて、筆者が初めて試みたのは「各回の講義の音声録音の配布」の部分のみ(筆者の肉声という生体認証にも使われうる個人情報を、これまでの試行ではプライバシーの見地から公開していなかった)であり、その他の部分(ホームページの使用、PDF書類での講義ノートの配布、ウェブページ上に準備した調査回答用フォームを利用した設問と、それへの解答の受付)については、すでに多年の実施実績があった。

とはいえ、このような全体的な設計に依拠したインターネット経由の遠隔授業システムを構成し、そ

れに全面的に依拠した2つの半期講義を、まったく自分1人だけで運営する作業として実施することは、筆者の約35年間にわたる教育実践のうちでも最初の経験だった。言うまでもなく、ここに含まれるのは、ホームページの作成、講義ノートの執筆とそれをもとにしたPDF書類の作成、各回の講義音声録音の作成、それらのHP上への掲載と配布、1年間にわたる毎回のHPの書き換えと管理、それらに依拠した設問の公開と解答の受付、それらの整理と成績処理といった、きわめて多岐にわたる半期ずつ2つのセッションの作業だった。そのため、多くの問題が事前から予想されたが、実際に生じた問題は、それほど多数ではなかった。以下それらについて略述する。

3. 遠隔講義実施上の問題点

3-1. 受講者の問題

高校を卒業したばかりの人間が、大学の学部1年生になった春から、今回の新型コロナウイルス感染症に起因する大学授業の遠隔化が実施されたことになる。すなわち、これらの学生の多くは、例年の新入生と同様の大学生としての実体験をすることなしに、いきなり各種の遠隔授業による高等教育の授業を受講することになった。

このことの含意には、いろいろな可能性があった。もっとも顕著な影響をもたらすと考えられたことは、この状況では、各学生の大学内の自発的集団（部活、サークル活動など）への集団所属がほぼ不可能であるため、例年であればこれら自発的集団への所属を通して伝達されている学生文化 student culture（学生の間で共通に抱かれ学内集団所属を通して伝達されている学内外での各種の行動指針や基本的な価値観）が、事実上、伝達されないままに前期の授業が実施されたということが考えられる。一般的な個人は所属集団から伝わる価値、規範、行動指針などに依拠することで、比較的無問題的に日常の行動を実施できるわけだが、このような所属集団への依拠ができにくい状態が長く続いていた。

学生文化がもたらす個々の学生への影響は各種ありうる。それは、一方では学内外での学生としての安定的な行動指針を与えるが、他方では「誰それ教員の授業でうまくやるコツは～」などといった形式での、授業内での定型的な振る舞い方をも事前に指南するものでもある。すなわち、教員にとって学生文化への接触が不十分な学生とは、行動の安定性について懸念を生じさせる反面、いわば「周囲に染まっていない」、高校生の意識のままの学生を相手にすることができることをも含意するとも考えられる。

実際に、今回の、とりわけ前期の遠隔授業の実施を通して、多くの履修者の履修態度（といっても、それは、返送される解答メールの内容と形式だけでしか判断できないが）は、概して非常に良好であり、いわば例年以上に“真面目”な解答が多数みられる状態だった。後期の講義になると、（おそらくは部分的に対面授業が再開されて学生文化への同化が開始されたこともあるのだろう）、より例年に近づいた履修態度（もし教員側の価値観から言ってよいならば、いっそう例年通りの学生文化に染まった、“あまり真面目でない者”もまま存在する全体的な履修態度）がみられるようになった。とはいえ、概して履修学生の解答メールにおける態度は非常に良好であった。このことへの判断は難しい。

過去においても、「不況時には就職活動が活発に行えない（早々に就職先を決めてしまう）ことから、就活に取られる時間が減少し、たとえば卒業論文の全般的な品質が向上する」といった皮肉ともいえる傾向が体験的にみとめられた。大学生は「未成年」と「社会人」の移行過程の存在であるため、彼らの日常的な行動は、学内での学業および学外での仕事や就職先といった、2つの異なる方向へ振り分けられる傾向がある。最終的に、学生の限られた時間を、大学と就職希望先とが、いわば取り合う現状がみられるともいえる。この見地からも、今回の非常事態下での学生は、とりわけ1年生の場合、例年よりもいっそう大学での学業に指向する傾向が全般に強かったといえよう。

このように、結果的に真面目に振る舞う学生が多かったため、ホームページ経由での遠隔授業は、想定以上に円滑に実施することができた。とはいえ、一定程度の実施上の課題が残ったのも事実である。ただしそれらは、リアル教室でも発生している問題でもあった。

1) 本人特定化の問題

ユニバーサルアクセスの理念から、あえてパスワード類でのアクセス制限を一切かけない（誰でもが随時参照可能な）ホームページ経由での講義配信と出席確認メール受付であったため、「じっさいにアクセスして講義を見聞きしているのは本当には誰なのか」「同様に、出席確認メールを送っているのは本当には誰なのか」という疑問は常に存在した。ただし、生体認証と常時リアルタイム双方向での受講態度確認などが不可能または非現実的であるかぎり、この問題は、物理的な教室内でも、パスワード類でのアクセス制限をかけた各種ウェブ授業でも、発生する可能性が原理的に排除できないものである。この関連の問題は、後藤（2015, 2019b）ですでに検討してあるが、確実な対応が困難な問題であろう。

とはいえ、とりわけ高等教育における授業や講義では、それほど確定的に「正解、正答」が与えられているわけでもない（しばしば教員が自らの立場から自説を開陳する）ため、あまりにも厳密な出席度、参加度、正答度の測定は、いささか強い要求であるともいえる（もちろんこの問題は、議論の余地のないほど解決済みの内容や、「正解」が一意的に確定できる語学習得などではあまり生じない。その意味で、講義内容ごとに大きな変化のある問題である）。今回の2授業では、あくまで「講義内容に基づいた」解答を要求したので、正答は毎回1つだけとなったが、他の機会に見聞きした内容に影響されたとおぼしき解答もまま見られたのは、リアル教室での小テストと同様だった。

他方で、授業へのアクセスの容易さ、参加しやすさ、出席確認メールの送信しやすさ、といったアクセシビリティの見地からは、ある程度、高く評価できるシステムであったと判断している。仮に本ホームページのトップページがブックマークしてあるとして、毎回の授業受講において必須とされるマウスとキーボード入力の種類と回数は、1. PDF書類の講義ノートを1クリックで表示させる、2. 講義音声を1クリックで再生させる、3. 出席確認フォームを表示させる、4. 出席確認のため2回のプルダウンメニューのクリックと、2回の「半角の学籍番号」「名前のひらがな」をキーボード入力する、5. 理解度確認のため2回のプルダウンメニューのクリックと2箇所のテキストボックスへキーボード入力をする、6. 「使用した端末類の種類」をプルダウンメニューから選択し、7. 「送信」ボタンを押す、という作業である。全体として「15回程度のマウスとキーボード入力の作業によって、1回分の講義

の受講と出席・理解度確認フォームの送信ができる」ことは、この種の遠隔授業システムとしては、それほど過度の入力作業を要求しないものといえるだろう。言うまでもなく、教育メディアに限らずあらゆるデジタルメディアの根本的な理念は、「できるだけトランスパレントな存在としてユーザーの知的営為の補助を行い、それがそれとして要求する操作と処理は最小限にとどめる」という設計思想である。

2) オンデマンド配布型講義の問題

そもそも講義内容の提供はほぼオンデマンド配布型で実施した。なので、受講者としては、「いつでもどこでも」講義内容へのアクセスが可能だった。他方で、このホームページ内容を収容しているウェブホスティングサービスの筆者の管理アカウントからは、アクセスの実態を記録した「アクセス解析」を随時参照することができた。もちろんアクセス解析といっても、個々の学生からのアクセス実態が見えるわけではまったくなく、全体的にどの程度のアクセスが行われているかがおよそ判明するに過ぎない。

そのアクセス解析結果を検討すると、やはり多くの受講生が、「当該日の当該時間」および「当該日の当該時間の数時間前」くらいに授業内容に接触しており、その意味では、オンデマンド配布型が頻用されたというほどではない。以下、1ヶ月に5回の講義回（10月2, 9, 16, 23, 30日）があった10月期におけるアクセスの時点の1ヶ月の総合計のグラフを、アクセス解析から引用する（重複縦棒は、左から Hits/Files/Pages 単位を示す）。なお、当該日以外のアクセスは少ない。

ここに明らかなように、履修者の当該 HP へのアクセスは、圧倒的に、授業開始の1時間前の12時から終了の午後3時前までの期間に集中している。なお、午前0～1時のアクセス数上昇は、基本的に筆者自身のウェブ書き換えとメンテナンス作業による増加である。ただし、これらアクセス数の具体的にどの程度が「講義の受信、受講」であり、あるいは「出席・理解度確認フォームへの解答作業」であるのかは、これだけでは判然としない。

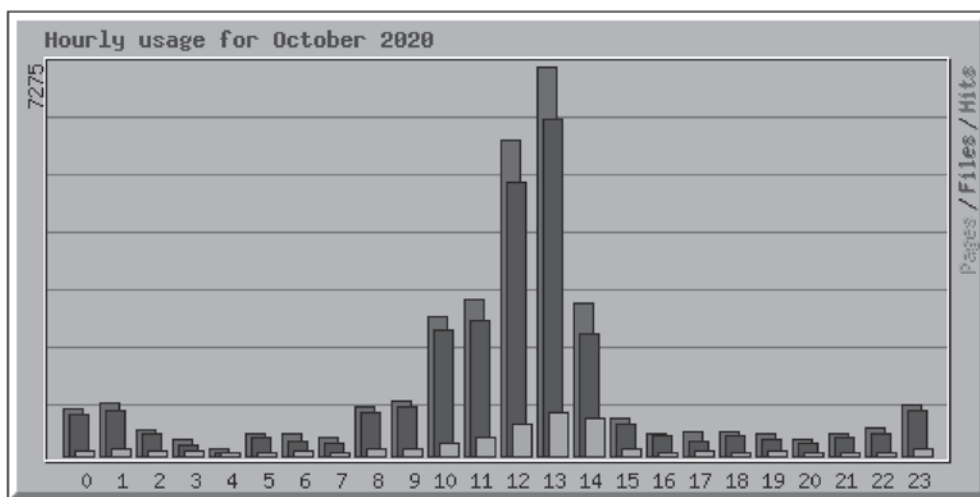


図1 2020年10月のアクセス時間帯（1ヶ月分合計）

順位	キロバイト	Hits	内容
1	16916240	706	講義音声 2 *
2	10545410	544	講義音声 3 *
3	10302154	472	講義音声 6 *
4	10178943	471	講義音声 5 *
5	9281668	418	講義音声 4 *
6	8036440	429	講義ノート (全体)
7	1092795	49	講義音声 7
8	790497	66	説明音声 (開始前用)
9	637730	25	講義音声 13
10	631377	22	講義音声 14

表1 トップ10アクセス・ファイル (キロバイト別), 2020年10月 (*は当月講義)

続いて、表1に挙げた、アクセス解析から得られた「10月のトップ10アクセス・ファイル別統計」からみると、やはり、当月講義の講義音声がかつともよくアクセスされている。とはいえ、これはキロバイト別集計ランクであり、容量の多い音声ファイルが上位にくるのは当然である。といっても、ほぼ同容量の「講義ノート (全体)」も頻繁にアクセスされており、当該ファイルをいったんPCなどにダウンロードしてからスタンドアロンで利用するのではなく、随時オンラインにて表示させて利用している学生が多いことが推測できる。同様に、全ての音声ファイルもダウンロード可能であり、しかも後期の講義では一括して14回分まで掲載しておいたので、これらをいったん全てPCなどにダウンロード保存もできたのだが、履修登録者数が約90名であるにもかかわらず、400～700回のヒット数があることは、これもまた、オンラインにてストリーミング配信的に、何度かに分けて、あるいは繰り返して、聴取していた学生が多数いたことを示唆する。このようなアクセス形態が自由に採用できたことは、やはり、この講義の全般的なユーザビリティを示しているだろう。講義音声の13回、14回という、最後の方の、現実には12月末から1月に実施の回の音声さえもがアクセスされていることは、このような自由な利用の可能性を裏づけている。とはいえ、それでも全体的な傾向としては、いくらオンデマンド配布型講義を実施しても、結局は「本来予定されていた定時」中心にアクセスしてくる学生が多いことが読み取れる。ただし少数尊重もまた、ユーザビリティの意味である。

ちなみに、例年のことであるが、一見して意外な国別識別をされるアクセス事例もやはり存在していた。表2にあるように、ほとんどのアクセス事例は、国内からと、一般的な.netなどから、あとは不明なものである。事実上無視できる範囲であるが、それでも、常識的にはありえない国別識別をされたアクセス事例も、非常にわずかながら存在してはいた。これらを経由しての国内からのアクセスであるのかも知れず、実際に海外に滞在していた学生等からのアクセスであるのかもしれない (この授業に関しては、この所在地の問題は、遠隔授業の実施であるから不問としている)。傾向としては、例年みられている海外からの若干数のアクセスが、今回はいっそう頻繁にみられたようだ。ただし全般的なアクセス数自体が急増していることも考慮すべきだろう (まだ講義を終了していない11月の時点で本稿を

順位	Hits	国別
1	23086	日本
2	5718	.net
3	2466	.com
4	619	不明
5	21	ドイツ
6	19	.org
7	16	ロシア連邦
8	15	EU
9	2	中国
10	2	ウクライナ
11	1	.edu
12	1	ブラジル
13	1	カナダ
14	1	ポーランド
15	1	連合王国

表2 トップ15アクセス(国別), 2020年10月

執筆しているが、この1年度で、おそらくアクセスカウンターは、6000を超える可能性がある。前年度初めにHPを刷新してカウンターをリセットし、2019年度は約1500までカウントされていた状態で、2020年度を開始した。執筆時点で約5500だった)。

以上のように、このような随時オンデマンド配布型講義には、「いつでもどこからでも参照(しようと思えば)できる」という安心感、安定感があることは事実である。「先に勉強あるいはチェックしておこう」という、予習をする奇妙な履修生の存在が示唆されているようだ。なお、実例として、「オンライン講義の方が、大教室で混乱することがないのでよい」という意味のコメントを残した履修生も存在していた。「大教室」は、各種のストレスが存在しうる管理の難しい環境であり、少子化の時代に、高校までの授業でそれを体験したことがない学生も多く存在する。その意味からは、一面、かえって安定的な学習環境が提供できた可能性もありうる。筆者自身も、学生のストレスが高じていると推測された前期6月頃には、「履修生を励ます担当教員からのメッセージ」録音を掲載したりもした。

3) 出席確認メール受付の問題

「出席・理解度確認フォーム」経由にて、出席と小テスト解答を送信する、という方式については、ほとんどの履修生が登録していた前期の授業の開始以前から、「送信試行用のフォーム実例」を設置し、それに誘導することで、不安感や不慣れ感を払拭させることができた。すなわち、特に正確な情報を要求しない、「あくまで形式だけの出席・理解度確認フォーム」の実物例を早期から用意し、随時、これを利用して「出席と解答を送信してみる」ことができるようにした。実際にこの試行フォームを利用し

た者の数は履修登録者の半分程度に留まったが、このような事前の作業によって、確認フォーム送信についての現実的な問題は、ほぼ発生しなかった。事実、いわゆる「デジタルネイティブ」となって久しい現代の大学生では、このようなフォームの利用はごく日常的な経験なので、ほとんど問題を感じることなく作業ができたようだった。感染回避のためリアル教室での期末試験は実施できなかった。

少数の問題としては、「問題なく送信されたとの通知が必ず表示されるのだが、何らかの不安感からか、2度以上にわたりフォームを送信してくる学生が、各回に1、2名みられた」ことがある（理論上、第三者の送信である可能性もあるが、多くは短期間に連続送信されたことから同一人と推定される）。フォームへの解答は、筆者が当該日の早朝からリアルタイムにて受信し、すべて手作業で内容を確認しエクセル表へ転記した。自動処理などは用いないので実効上の問題はなかったが、二重送信への対応はやや煩瑣な作業になった。

類似の多少の問題としては、「受付締め切り時間を過ぎて送信されるフォーム」という事例が、こちらはいっそう少ないながらもみられた。上記のように、講義内容の提供だけならば、ほとんど授業開始時点から全体について行われ、出席・理解度確認フォームの公開と受付についても、当該授業日の早朝から（というかしばしば午前0時になったらすぐに）行えるよう、こちらも筆者自身が手作業にて、ウェブページの書き換えを行っていた。この意味で、学生には、少なくとも12時間近くは、フォームを見て記入して送信する時間が与えられる実態となっていた。にもかかわらず、このような「遅刻提出者」がまみられた。ただしこのことは、現実の大教室であっても同様であって、講義が終わったずっと後になって、当該講義への出席カードなどが各種経路で届けられることはままある。いくら時間的な余裕を与えても、直前まで対応しないというのは、要するに受講時の心理的な構えの問題であって、言うまでもなく、動機づけの高低にかかわらず履修登録者には等しく対応するのが講義の原則であるから、これはどうにも仕方がないことだといえる。

なお、なぜゆえにこのような遅延フォームが送信できるかといえ、すでにPCなどに表示（＝ダウンロード）させたウェブページは、一定時間は有効であるため、いくら定時の午後3時に当該フォームをサーバー上から撤去しても、このような、直前にPC上に確保されたフォームからは送信が可能である」からである。さらに入念に、締め切り時間ジャストに受付メールアドレスを閉じるなり、消去するなりすればこの問題は発生しない。しかし、多少の遅れは許容するというのもまた、リアル教室での慣行となっていることであり、今回の遠隔授業システムでも、同様の原則で受け付けた。ただしHP上での一般的な（個人を特定しない）注意喚起は行った。

3-2. 実施者の問題

1) 出席・理解度確認フォーム公開時期の問題

既述のように、ホームページ管理はすべて筆者が単独で手作業にて実施した。このため筆者の健康状態や生活時間に制約された時間帯でのホームページ書き換えとメンテナンスが行われた。しばしば実施日の午前0時の時点で出席・理解度確認フォームを公開し、送信も可能とした。このようにすると、その数時間後からごく早朝までにフォームを送信してくる2、3名がまま存在した。といって、これは厳

密な意味での定時に実施される遠隔授業システムとは想定しなかったので、特に問題視しなかった。圧倒的多数は当日正午～3時にフォームを送信しており、この程度ならば許容の範囲と考える。ただし、後から解答する者が、別者から情報提供されているなどの可能性も、リアル教室と同様にありうる。

2) 個人的意見への対応の問題

この遠隔授業システムでは、その性質上、「個人的に照会される質問などへの対応」はしないようにした。本来、大教室での情報提供型の講義においては、特に学生相互のリアルタイムでの意見発信や意見交換を求めているわけではない。単に必須（と担当者が判断した）講義内容が伝達され、その理解と把握が小テストなどで確認されるだけである。そこで得られた知識と情報が、後の学習の基礎となる。

とはいえ、これは現実の大教室でもときおり生じることだが、「追加の情報を求めてくる学生」などがままたま存在する。大教室での対応は出席者全員に対して平等に行われるものであろうから、このような場合、質問を受けたら、それをそのまま教室全体へアナウンスし全員に周知したのち、一定の解答をする、という対応が望まれる。ところで、あらかじめ内容が講義ノートや講義録音で固定されたこのタイプの遠隔授業システムでは、そのような柔軟な対応が困難である。

突発的に、理解度確認フォームの記入欄に、別の話題を質問してくる学生がいた。この場合、次の理解度確認フォームに、その質問に関連した設問を追加し、「このような質問がある学生から出されたが、皆さんはどのように考えるか？」という質問を、全員に行った。このようにすることで、出席者全員に情報が平等に行き渡ることを心がけた。

また、理解度確認フォームの自由記述については、毎回、目についた特徴的または代表的な解答を抜き出しておき、前期では次の講義録音冒頭で、一挙に講義録音を公開してしまった後期には追加の（4、5回分まとめた）紹介録音音声として、音声ファイルにて全員が参照できるようにした。このことにより、受講者相互のフィードバックを、やや時間差が含まれるが、確保することにした。これは実教室でも同様であり、いったん全員の解答用紙をチェックしてから、次回以後に、整理した傾向や特徴的または代表的な解答を紹介していた。それをウェブページ上で代替した。したがって一定量の学生間のフィードバックが確保されていた。

3) 提示可能なメディア内容の制限の問題

海外の場合、講義や講義ノートで利用する別者の著作物については、それらを一括して管理し許可を申請する著作権対応センター的な部署が存在しており、教員サイドがそのような講義内での必要な引用に過敏に配慮する必要性はほとんどないことが多い。しかし国内でそのようなシステムは取られていないことも多く、別者の著作物の講義内での利用については注意して自己判断する場合が多い。今回は遠隔授業システム経由で著作物の内容が配布されるので、日頃の実教室で提示しているよりも、いっそう限定的な各種の実例提示しかできなかった。全面的なマルチメディア教育システムにおいて、もっとアナログな対面授業よりも、コンテンツ提示の可能性が狭められるのはいささか皮肉ともいえる事態ではあるが、講義の安定的な運営と成績評価のため、できるだけ他者の著作物の提示は抑制した形式での講

義運営となった。

4) 一般的な労働量の問題

今回の遠隔授業システムの運営でふたたび実感したのが、「いかに対面授業では同時並行的に複数の作業が実施できるか」ということだった。普通の講義でなら1回できていることを、何度にも分けて実施する必要があった。

前期では12回にわたり、90分の講義音声を（1人で深夜に一発録音で）録音し、それを90分かけて聞き直して言い間違いなどを確認したのちHPで文字にて告知し、その授業の実施日には、フォームを公開し、出席・理解度確認フォームを早朝から午後まで受信し整理して、その解答を整理した次回以後のフィードバック用の音声を追加で録音する（後期は15回実施だったので音声録音は各回60～70分とした。前期は講義90分+解答30分で120分×12回、後期は講義60分+解答30分で90分×15回を想定）。これらには、実教室では同時並行的に作業してしまえるものも含まれており、それを数回にわけて数日～数週間かけて実施するという作業は、いたずらに労働量を増加させる傾向があった。普段の2～3倍の作業量が必要だった。しかも講義内容の性質上、時事的話題への言及も多いため、講義音声の「使い回し」も容易にできないようになっている。考えようでは、一般的な遠隔講義よりもいっそう一回性の高い講義が実施されたようにも思われる。ただし、非常時でなければ、あまり効率的な営為とはいえないとも考えられる。

非常事態下でもあり、新入生を安心させる必要から、学生による教員の似顔絵やフォーム受付用PCを使用する現場写真なども掲載して、「親しみやすく、アクセスしやすい」ことを心がけた。これらのためにも一定量の追加の作業が必須だったが、その効果はある程度あったと想定している。何よりも、このような自由でややパーソナルな設計が可能であることが個人HPを利用する意義であり、その意義を反映する運営を意図した。

4. 今後の課題

本論冒頭に記したように、このようなデジタルメディアを利用した遠隔高等教育の研究開発および実践は、1990年以来、筆者がはからずも関係してきた研究開発領域となっていた。とりわけ2000年前後から、各種の教育用メディアを利用した授業運営のデジタル化の試行と実践を、各方面にて実施してきた。今回の新型コロナウイルス感染症の流行に伴う大学における遠隔授業の実施要請は、期せずして、このような筆者の多年にわたる研究開発を集大成的に実用化する契機となった。また、その自覚をもって遠隔授業に望んだ。

前述したように、リアル教室内であれば提示できていた、大量のメディア内容の実例の提示が事実上困難だったため、マルチメディア教育としては、日頃よりもむしろ「地味」な授業内容とせざるを得なかった（もし仮に、講義の運営が不適切だとみなされると、それに依拠した単位認定も一定の疑義を受ける危険性を懸念した）。ただし、全講義の音声とテストの解説音声をも配布し、また講義ノート内で

多くの自作の図表を提示するなどして、この明らかな不足（筆者の講義に、各種コンテンツ事例の多メディア的な提示を期待する新入生もまま実在していた）を補うように努めた。こうした各種メディア類の提示についてはリアル教室内での講義に匹敵するものではなかったが、随時オープンかつオンデマンド的に利用できる今回の遠隔授業方式にも、ある程度の利点は認められると思われる。

今後の課題としては、遠隔授業システム自体のさらなる洗練はもちろんのこと、講義の性質に応じて、具体的にどのような種類と形式でのコンテンツの提示と提供、出席確認と理解度確認、アクセスの制限と非制限、学生相互のフィードバックの確保などが求められるのかをさらに明瞭に特定化した上での全体システムの設計と運営が必要だと思われる。公的な性格をもつ高等教育には、それを配慮した上での適切なリスク管理が求められる。遠隔授業が対面授業の対照物であるかぎり、その設計と運営は、そもそも対面授業の本来的な性質と必要とを十分に把握し理解した上で実施されるべきものだと考えられる。

謝 辞

筆者は多年にわたり遠隔高等教育の研究開発を試行してきたが、その35年間ほどの教育実践においても、ここまで全面的にデジタルメディアを利用した遠隔高等教育の本格的な実施は初めての体験だった。1教員の公的な教歴の最後に、そのような集大成的な作業が実施できたことは、全世界規模の災厄の中ではあるのだが、筆者の研究経歴にとっては一定の僥倖ともいいうることであろう。各人の手元のデジタルデバイスを駆使して、筆者の1年間2種類の遠隔授業に参加しつづけ、貴重な事例を結果的に提供してくれた、しかも決して直接に対面することがなかった、2020年度の後藤将之担当科目「マスコミ原論」および「社会心理学」の履修学生諸兄姉の努力と忍耐に、敬意と謝意を表します。また、このような独自の遠隔授業の実施を容認してくれた成城大学文芸学部に感謝します。

参考文献リスト

- 後藤将之. 講義におけるオーディオ・ビジュアル素材の利用をめぐる具体的問題. コミュニケーション紀要 22 : 81-94. 2011.
- 後藤将之. 社会的攻撃性 social aggression についてのシンボリック相互作用論的研究. コミュニケーション紀要 23 : 1-21. 2012.
- 後藤将之. 討議・意志決定支援のための小規模デジタル CSCW システムの運用実験 中間報告1 教室内での匿名条件下での討議への促進効果について. コミュニケーション紀要 24 : 57-76. 2013.
- 後藤将之. 討議・意志決定支援のための小規模デジタル CSCW システムの運用実験 中間報告2 教室内での匿名条件下での討議と意思決定の促進. コミュニケーション紀要 25 : 85-95. 2014.
- 後藤将之. 出席している, ということ 授業出席行動の社会心理学(1)GPA 視点の場合. コミュニケーション紀要 26 : 71-86. 2015.
- 後藤将之. 小規模 CSCW システムを利用した集合行動促進の実証的研究. コミュニケーション紀要 28 : 23-37. 2017.
- 後藤将之. 放送の近未来・再訪 30年後の再検討. 成城文藝 248・249 : 34-56. 2019a.
- 後藤将之. 授業出席行動の社会心理学的研究 出席管理を中心として : 出席している, ということ(2). コミュニケーション紀要 30 : 1-11. 2019b.
- Sacks, P. *Generation X Goes to College*. Open Court. 1999.

The Practices and Risk Managements of Distance Higher Education in the 2020 COVID-19 Epidemic Outbreak in Japan: Web-Based Remote Deliveries of Lectures and Their Evaluations

GOTO Masayuki (Professor Emeritus of Seijo University)

Abstract

Upon the university's decision to deliver all classroom lectures in some distance educational formats due to the 2020 COVID-19 outbreak in Japan, the author, a researcher and experimenter of various forms and possibilities of digital multimedia platforms for distance education and learning since 1990, realized a fully web-based on-demand delivery of one's own two lectures for fresh persons, "Principles of Mass Communication" and "Introductory Social Psychology," both the author's chief lecture contents for about 35 years.

Using text & drawing based lecture note of a book length and voice recordings of the 15 sessions of each course, possibilities, problems and risks of on-demand university lectures, web class management and student testing through web-based test forms are critically and realistically examined using students' actual responses and the web-hosting company's network access records. It is asserted that most of the seemingly weak points of web-based class management can be found also in actual physical classrooms, and thus not problems peculiar to the distance educational methods. Mobile learning procedures seem making students' course taking more voluntary and free. But, just as in the case of precise identification of actual person who is present to the class, certain vagueness did accompany to the digital distance educational process of higher education at university, which makes clear and sharp grading of the students very difficult or not very plausible. Further considerations seem in need for these issues, regardless of their being real class room lectures or web-based ones.

Finally, the author expresses his gratitude toward the students, who patiently participated in the web-based courses, with whom the author had not a chance to meet face to face, even after one year's nearly 30 class sessions in sum.

KEYWORDS: Digital Distance Education, Higher Education in COVID-19 Outbreak in Japan, On-Demand University Lectures, Web-Based Class Managements, Web-Based Student Testing and Evaluation, Educational Web-Page Design, Mobile Learning

2020成城大学「マスコミ原論」「社会心理学」

後藤将之 講義ノートダウンロード・出席メール受付サイト

ホーム

5065



↑ 2019年の履修生による担当者(から59年後)の似顔絵。 (某氏、こちらで用紙の野線を消去した上、特別の許可は不必要と判断し、使わせてもらいました。ありがとうございます。いちおうコメント内容は、無記名で紹介することがあると、事前に説明してありました。似ていると好評でした。)



©Masayuki Goto

↑ Masayuki Goto, 3 yrs old, 1960. 「あのころは楽しかった……」という、たぶん七五三の時の写真(何と80年前だ)。でも、すでにもの覚えしげな面影も見えます。この頃からずっと自己意識がはっきりした子どもでありました。動物学科へ進んで「ボルネオで新種のチョウを発見するような生活」を夢想していたのですが、何をどうまちゃがったのか、地球上で史上もっとも凶悪な動物の研究者になってしまい、まだ混乱しています……。

2020「マスコミ原論」(前期終了)&「社会心理学」(後期実施)

ここでは「マスコミ原論」(前期、終了)「社会心理学」(後期、9/25開始)の講義ノートなどの配布と出席メール受付のためのホームページです。

このHPを掲載しているのは、担当者が10年以上問題なく、この目的でレンタルしている、大手の安全な商用レンタル・ウェブサーバーです。よくネットショップなどが使っているサービスで、ステルス広告やフィッシングなどの心配はありません。

すべての配布物は、「iPhoneSEの水平画面+4G回線」にて充分受信できるサイズで担当者自身が執筆し、構成したPDFファイルです。著作権が他者にある図像は配布できないので、灰色の四角にしています。ご理解ください。

◎重要な緊急連絡：コロナウイルス未終息のため、後期の後藤「社会心理学」(金3)も、今回と同様に遠隔授業で実施することになりました。詳細は、開講前に、このHPで掲示します。その他のWebサービスは使いませんので、ご注意ください。

◎社会心理学第9回11月20日。受付URLはHP下方↓：早朝から受付。終了は午後3時厳守。

残り半分以下になりました。年末年始も近づいてきました。頑張りましょう。(^^)。

◎記述問題の紹介は、4、5回まとめて口頭録音を追加掲載します。お待ちください。→1回目掲載しました(このHPの左下.10/27) しばらく掲載します。

◎日程確定。後期は全て金曜3現：9/25、10/2、9、16、23、30、11/6、13、20、27、12/4、11、18、1/8、15。

以上15回。当初、行事で休講予定だった10/23は予定が変更

資料2：遠隔授業ホームページの実例2：出席・理解度確認フォーム（解答送信直後）：

☰

出席確認のメールは 正常に送信されました (^_^)v。

今日の遠隔授業、お疲れさまでした。担当：後藤将之 m(_)_m

出席確認1：あなたの所属する学年（プルダウンメニューから1つ選択）*

1. 学部1年生

出席確認2：あなたの所属する学科（プルダウンメニューから1つ選択）*

1. 文芸学部国文学科

出席確認3：あなたの学籍番号を正確に「半角英数字」で入力してください（例：19L5142）（半角指定なのは文字化け対策です）*

出席確認4：あなたの名前を「全角ひらがな」で正確に記入してください（例：やまだはなこ）（ひらがな指定なのは文字化け対策、留学生はカタカナでも可）*

Q1 理解確認質問1 「講義に基づいて「ジゼル」の流行論の特徴」である考え方をもっとも適切に説明した選択肢を選びなさい？*

1. 流行は個人的な嗜好で採用される

Q2 理解確認質問2 「講義に基づいて「パッシング」をもっとも適切に説明した選択肢を選びなさい？*

1. 無視されること

Q3 理解確認質問3 「講義に基づいて、「外見労働」について短く具体例をあげて説明しなさい？*

Q4 記述質問 「講義ノート55頁の図に基づいて「自分が周囲からどう定義され、また自分から定義しようとしたか」の過去の体験を記し、それへの今の感想を記しなさい？」（講義ノートに基づき300～500文字で記入してください）*

Q5 どんな機材からこのフォームを送信しましたか？（履修実態調査のため毎回質問）（プルダウンメニューから1つ選択）*

1. スマートフォン

回答を終えたら、↑にある「出席を送信！」ボタンを1度だけクリックしてください。

送信できれば、「正常に送信されました」と、ページトップに表示されます。

・1度「出席を送信！」ボタンを押せば、学籍番号・名前と上の回答が担当者のサーバーへ送信され、あとは訂正できません。絶対に何度も「送信」ボタンを押さないでください。

・もし送信前に回答を全てリセットするときは「リセット」ボタンをクリックしてください。（すべて無選択に戻ります）